

庄」の内を流れていることから「庄内川」の名がついた。尾張平野は木曾山脈が下がってきて平野部にて形成された、木曾駒ヶ岳---恵那山---三国山・猿投山へと続いている。尾張に入り丘陵との間を蛇行し、多くの中小河川が庄内川に流れ込み広い氾濫原を形成している。特に矢田川と合流する辺りは現在も大雨が降ると浸水に悩まされている。

西部では木曾川の扇状地からの川も流れ込み洪水頻発地帯になっている。五条川も江戸中期に新川ができるまでは庄内川とつながっていた。

考古遺跡の分布

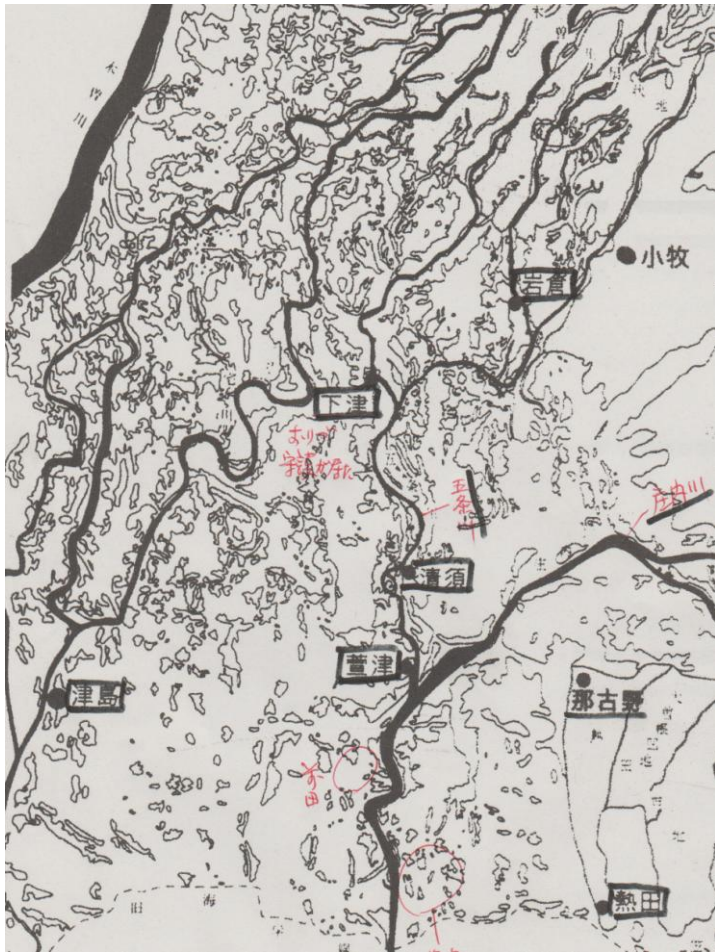
- * 弥生時代の遺跡図を見ると、この地域最大の朝日遺跡をはじめ庄内川流域は早くから水田化が進み、条理が設定された。
- * 庄内・矢田川流域は名古屋東部の台地上の古墳群と並んで多くの古墳造営がなされた地域。
- * 律令国家は尾張支配の中心を木曾川沿いに置いた、日光川は江戸中期に途中から東へ付け替えられた。以前は津島にそそいでいた。

戦国の城と遺跡

- * 中世の尾張の守護所は下津(おりつ)であり、戦国期は岩倉と清須が尾張を半分ずつ分け合って支配していた。これらはみな庄内川水系にある。

庄内川・五条川の合流地帯の重要性

- * この辺りが尾張の中心の南北と東西の線が交わる、尾張の流通・交通の中心地であったと考えられる。清須の位置も、このことと関係するのではないか。



- * 鎌倉街道の萱津(かやつ)宿は庄内川・五条川の合流地点で川を渡り、東宿に入り古渡方面へ向かう。秀吉の生まれた中村はそのすぐ南続きであり、鎌倉街道が通る内陸部の物流拠点だった。
- * 日比津・枇杷島・須が口・河原の地名があり、この辺りは広い低湿地帯。
- * 鎌倉街道の萱津を陸路として理解するのではなく、五条川と庄内川の舟運も含めて考える必要がある。
- * この合流点は弥生時代まで海だった。古代中世においては富田荘のように沿岸部の開発が行われるが、合流点付近は長く潮の入る入江であり、須や津のある湿地帯だった。
- * つまり合流地点は洪水地帯であった、そのことが今日においても如実に示されたのが、東海豪雨の時の浸水エリアと重なっている。
- * 萱津には商売で儲けた長者がいた。一遍聖人絵伝に一遍を助ける有徳人(金持ちの商売人)がでてくる。

*庄内川沿いには多くの荘園・寺社があった。於田江庄・稲生庄・安食庄・山田庄・狩津庄・柏井庄・篠木庄と、定光寺・光蔵院・長母寺・大永寺・竜泉寺・永保寺など。

瀬戸・東濃は全国一の焼き物の産地

*中世になると、この地域の焼き物の中心が猿投山の西南麓から、瀬戸・東濃に移る。古瀬戸は中国の磁器をまねて、釉薬をかけて全国流通。

*中世後期には川沿いにお寺が多い

庄内川水系流域図

